

## 東洋医学における好転反応

東洋医学、とくにあん摩では揉み返し(もみかえし)、鍼灸では瞑眩と呼ばれる。治療過程において頻繁に起きることなので、事前に説明がされることが多い。慢性的に疲労していた筋肉がほぐれ、溜まっていた老廃物が血液中に流れること等が要因として考えられる。だるさや眠気、ほてり等を感じるケースが多い。眠気が生じると不眠症が治ったと勘違いしてしまうことがある。他、発熱、下痢、発疹、咳などに現れることもある。また、老廃物が尿として排出されるため、その色が濃くなったりする。その他にも、主訴となる症状が一過的にぶり返したかのように見える場合もある。

瞑眩は、東洋医学の瞑眩(「めんけん」または「めんげん」という漢方用語が元になった言葉と考えられている。この瞑眩という言葉は中国古典『四書五経』のうちの『書経』にもみられる。

漢方薬の厳密な定義に従うと、「瞑眩が発生するのは多くて1000人に1人程度」

であり、症状が現れた後、長くても1~2日で収まる。漢方では患者の体質(証)を判断してから調剤を行うが、この判断を誤った場合に瞑眩がおきる。これを起こすことは漢方医として未熟で恥ずかしいことである。この場合、証を見立てなおしてから、再度調剤を行う。